

家族社会学とヘーゲル哲学

久田健吉 (名古屋立大学「市民学びの会」講師)

今、女子大学では「家族社会学」が横暴されていると聞く。

女子大学で家族論というところ、何か古いタイプの「良妻賢母」の思想が思い出され、ナンヤこれはと思われられるかもしれない。私も少しは感じる。しかし一般大学でこのテーマが問題にされるとしたら、私は両手を挙げて賛成である。

家族とは何だろう。家族はどう考えたらよいのだろうか。今社会には倫理の崩壊現象が見られる。秋葉原事件、池田事件、サカキババラ事件はもちろんだが、地域からボランティア精神が衰退していることは否めない事実である。深いところで家族を問題にしなればならない理由はここにあると思う。

戦後の文化生活を支えた婦人会活動は、老人会婦人部になり活動を停止せざるを得なくなっている。お墓掃除や盆踊り、敬老会を担う人がいなくなり、区長や区会議員が汗水たらしてやっているが、この人たちはみな定年組。後何年持つだろう。死んだらやらんしなあとという会話がもつばらとか。生きている間はやるやうなど励まし合って。

団塊の世代が後期高齢者になって働けなくなると時、日本はどうなるのだろうか。自助だけの、ジロチュウ社会になってはいたくないが。

戦後の新しい家族論が、つまり女性の解放を柱とした家族論がこの現象を生み出したと言ったら語弊があるだろう。しかしこの現象を想定せずに新しい家族論を展開してきたと言ったら、少しは納得していただけたらと思う。

新しい家族論は古い家族論との闘いに明け暮れてきた。家父長制の上に立った封建的家族論と。女は子どもを産む道具とか、夫婦別姓は日本家族の美徳を損ずるものといった手合いとである。もちろんこれとの闘いは文句なしに正しい。

しかし家族とは何かという視点を忘れてきたのではないか。家族の存在意義を問う家族論を。ヘーゲルは人倫(助け合う社会・隣人愛の社会)の土台は家族にあると言う。人間は単に自立するだけでなく、社会や国家を築き支え合える人間になるのだからなければならない。

本レポートは、『いっしょに暮らす。』(長山靖生)と『世代間連帯』(上野千鶴子・辻元清美)で現代家族論を問題にし、『ヘーゲル国家論の原理』(久田健吉)でヘーゲルの家族論を見ることにする。